

鹿児島大学障がい学生支援シンポジウム 2024

鹿児島の障害学生支援と就労移行に関する情報交換会 開催報告

概要

日時 令和6年10月22日(火) 13:00~17:00

会場 鹿児島大学郡元キャンパス 学習交流プラザ2階学生交流ホール

司会 中尾 誠一(本学障害学生支援センター 特任助教)

開会挨拶 有倉 巳幸(本学理事(教育担当) 副学長)

第一部: AT ライブラリー

東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム(PHED) 代表

近藤 武夫 氏

東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム(PHED) 特任助教

松清 あゆみ 氏

京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム(HEAP) コーディネーター

辻井 美帆 氏

第二部: 障害学生支援と就労移行に関する情報交換会

話題提供① 東京大学 PHED での取り組み(14:00~14:50)

東京大学 先端科学技術センター 教授

東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム(PHED) 代表

近藤 武夫 氏

話題提供② 鹿児島大学での障害学生支援の取り組み(14:50~15:10)

鹿児島大学 障害学生支援センター 特任専門員

川添 茜

話題提供③ 鹿児島障害者職業センターでの取り組み(15:10~15:30)

独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 鹿児島支部

鹿児島障害者職業センター 主任障害者職業カウンセラー

瓜生 彰 氏

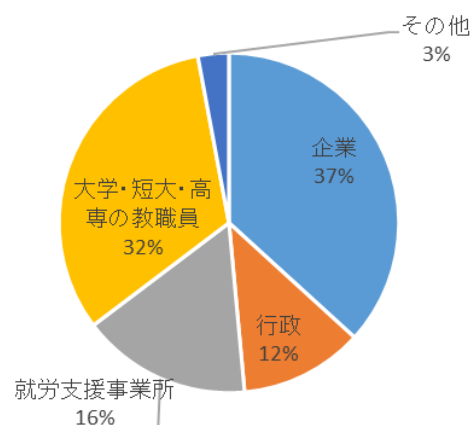
閉会挨拶 前田 雅人(本学学長補佐 法文教育学域教育学系教授 障害学生支援センター長)

参加人数及びアンケート結果

1. 参加者

所属	人数
企業	25
行政	8
就労支援事業所	11
大学・短大・高専の教職員	22
その他	2
合計	68

参加者の所属カテゴリー(n=68)

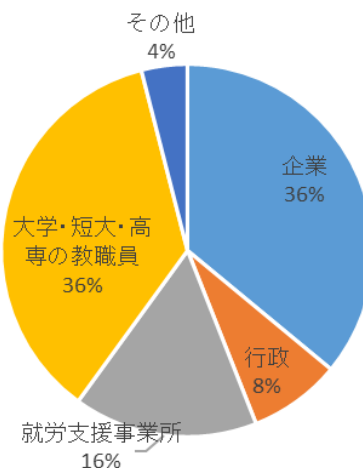


2. アンケート回答者の所属について

所属	人数
企業	18
行政	4
就労支援事業所	8
大学・短大・高専の教職員	18
その他	2
合計	50

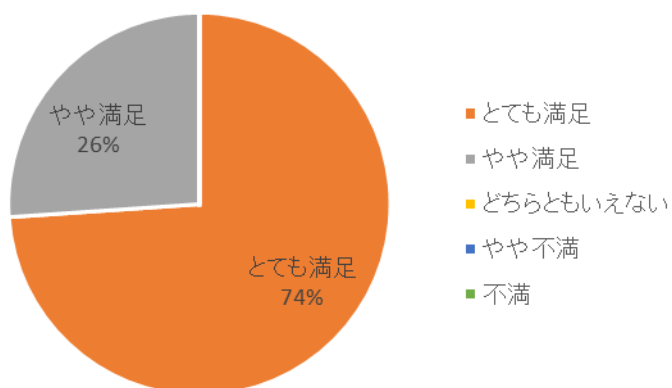
アンケート回収率：73.53%

アンケート回答者・所属カテゴリー(n=50)



3. 今回のタウンミーティングの満足度

満足度

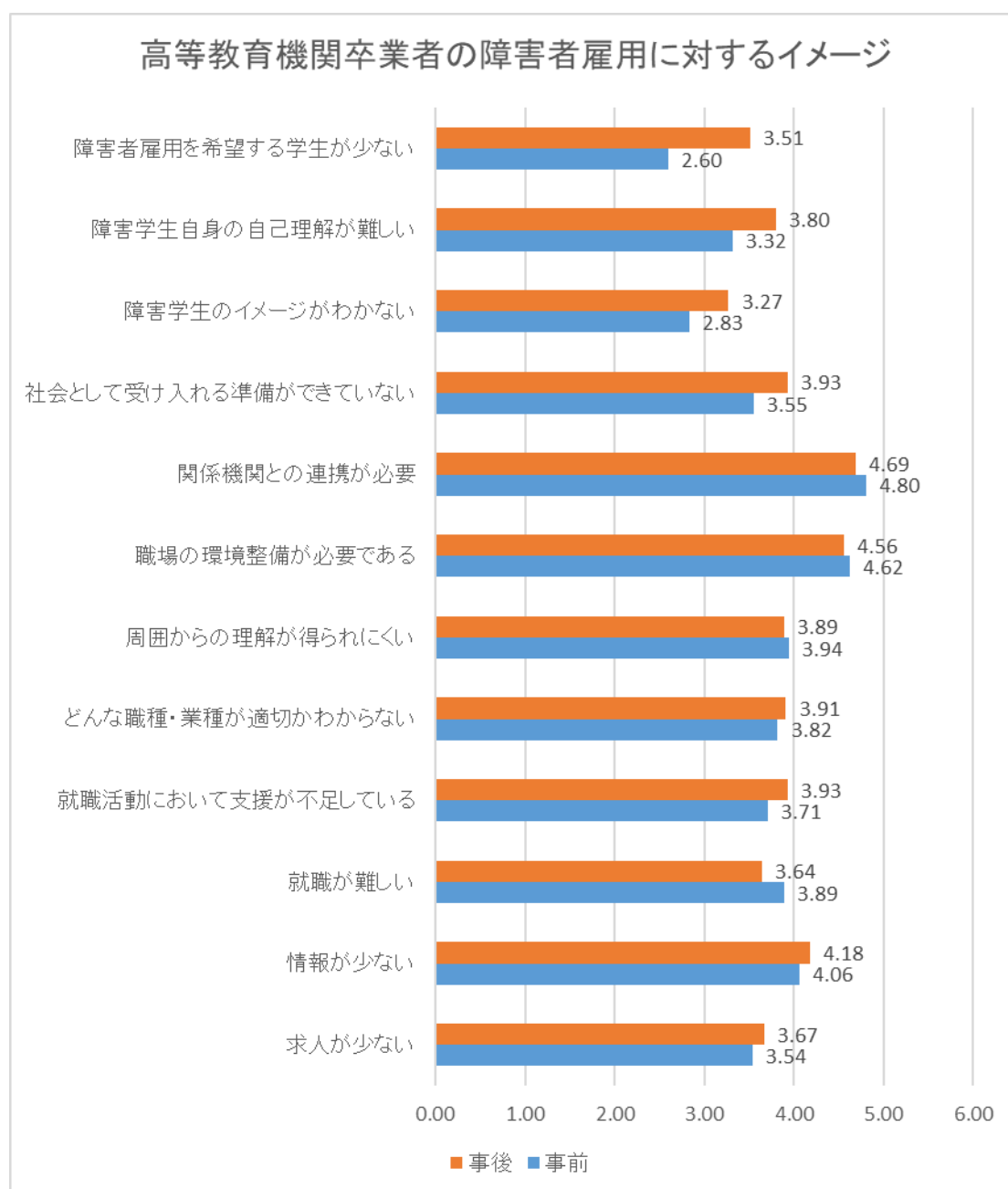


4. 高等教育機関卒業者の障害者雇用に対するイメージ

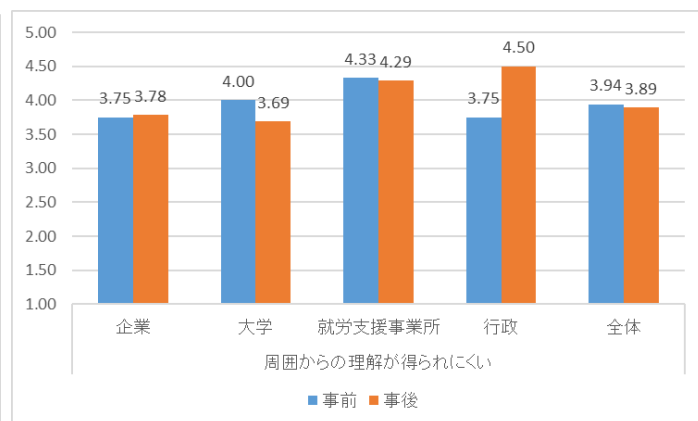
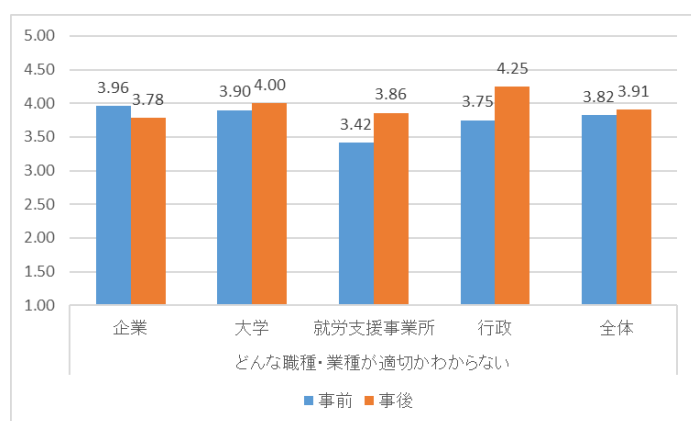
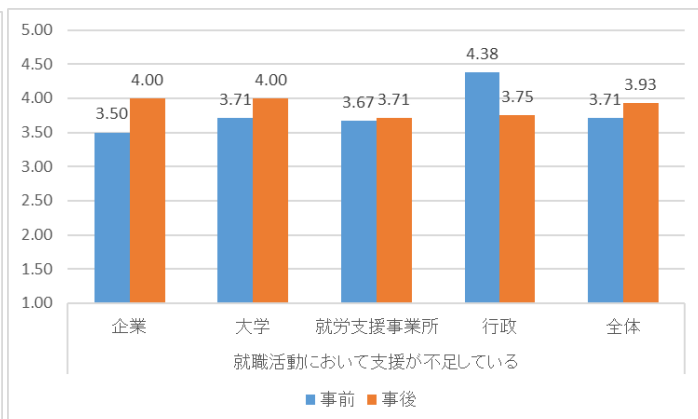
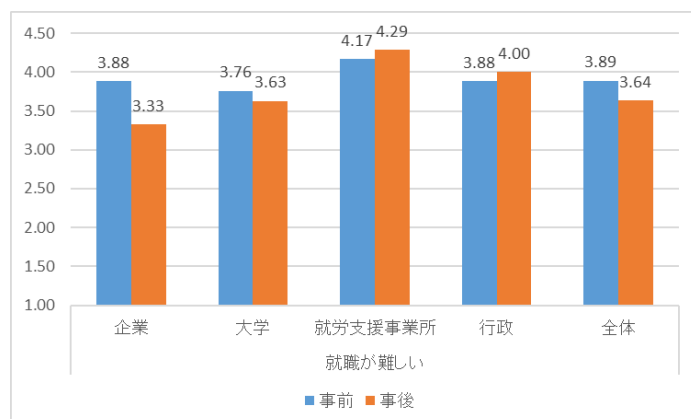
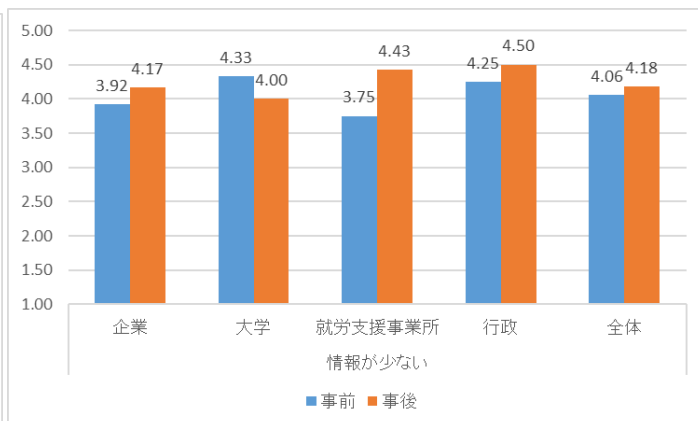
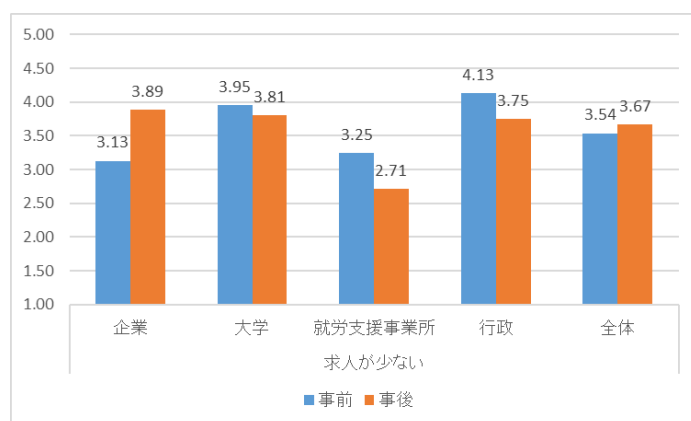
高等教育機関卒業者の障害者雇用に対するイメージについての12項目を「わからない(0点)」、「そう思わない(1点)」～「そう思う(5点)」とし、申込み時点の得点とタウンミーティング参加後の得点を比較した。

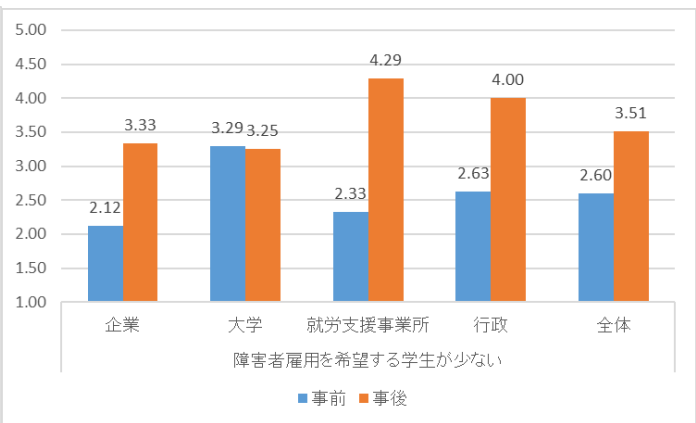
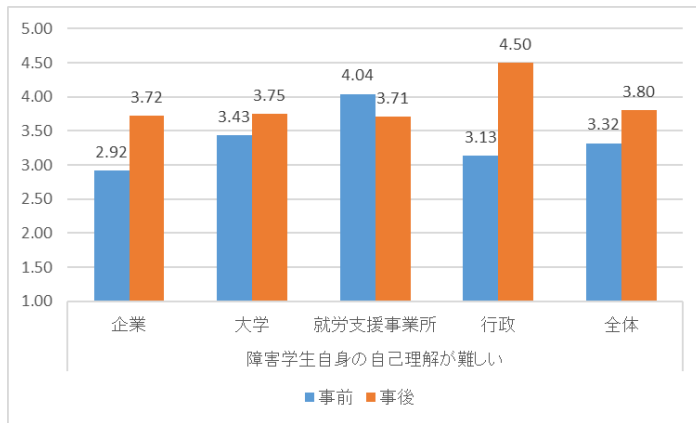
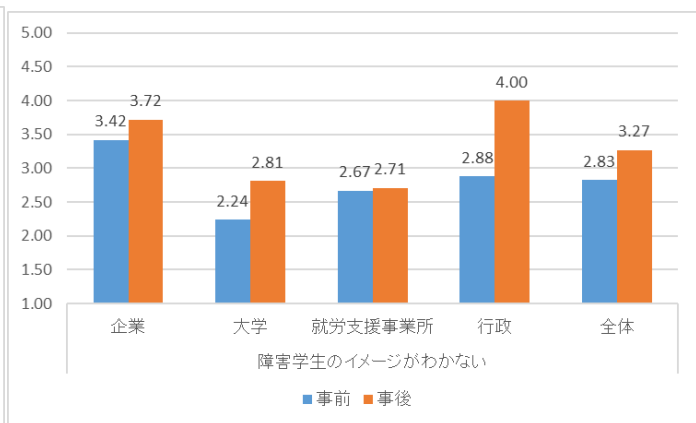
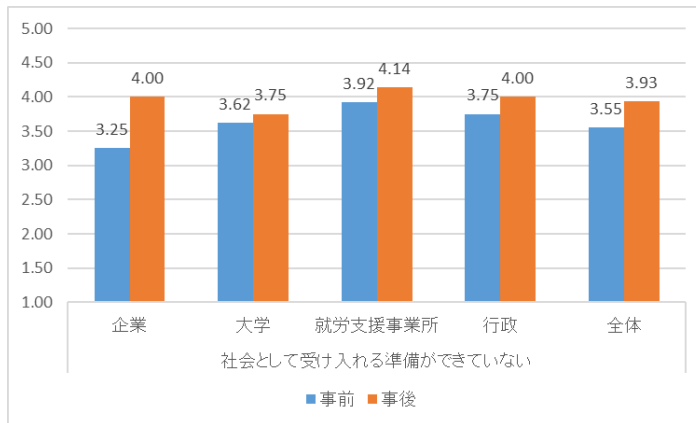
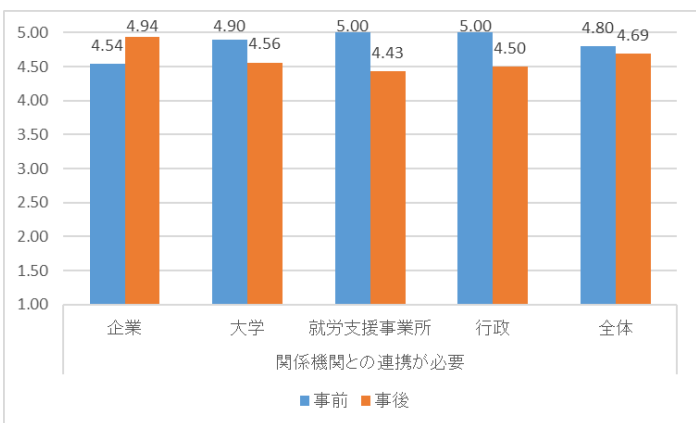
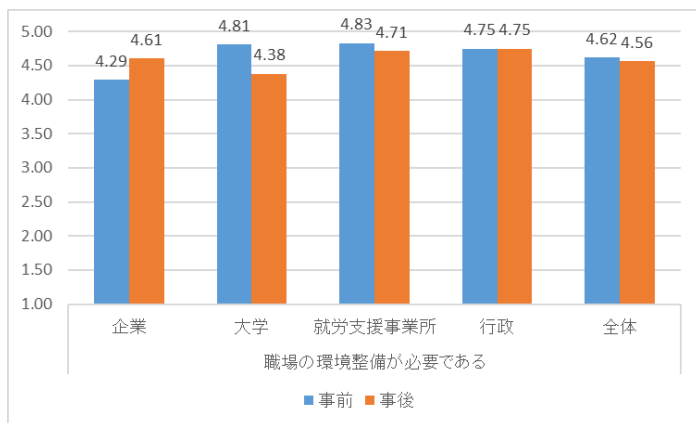
その結果、タウンワーク申込み時点(事前)では「関係機関との連携が必要」や「職場の環境整備が必要である」という項目の認識が高く、「障害者雇用を希望する学生が少ない」や「障害学生の自己理解が難しい」、「障害学生のイメージがわからない」という項目は比較すると認識があまり高くはないことが示された。

タウンミーティング参加後(事後)では、多くの項目で認識が高まっていることが示されたが、「障害者雇用を希望する学生が少ない」や「障害学生のイメージがわからない」などは他の項目と比較するとタウンミーティング参加後でもあまり高くはないことが示された。



参加者の所属別に見ると、タウンミーティング申込み時点（事前）では、「障害学生のイメージがわからない」という項目では大学・短大と比較して企業の得点が高く、障害学生のイメージを持つことあまりできていないことが考えられる。また、「障害学生の自己理解が難しい」という項目では申込み時点（事前）とタウンミーティング参加後（事後）で行政の得点が高くなっており、障害学生の自己理解の難しさを感じている。「障害者雇用を希望する学生が少ない」という項目では、申込み時点（事前）とタウンミーティング参加後（事後）で大学・短大以外の参加者で得点が高く、障害者雇用枠を希望する学生が少ない現状が認識されたと考えられる。





5. グループセッションで出た意見

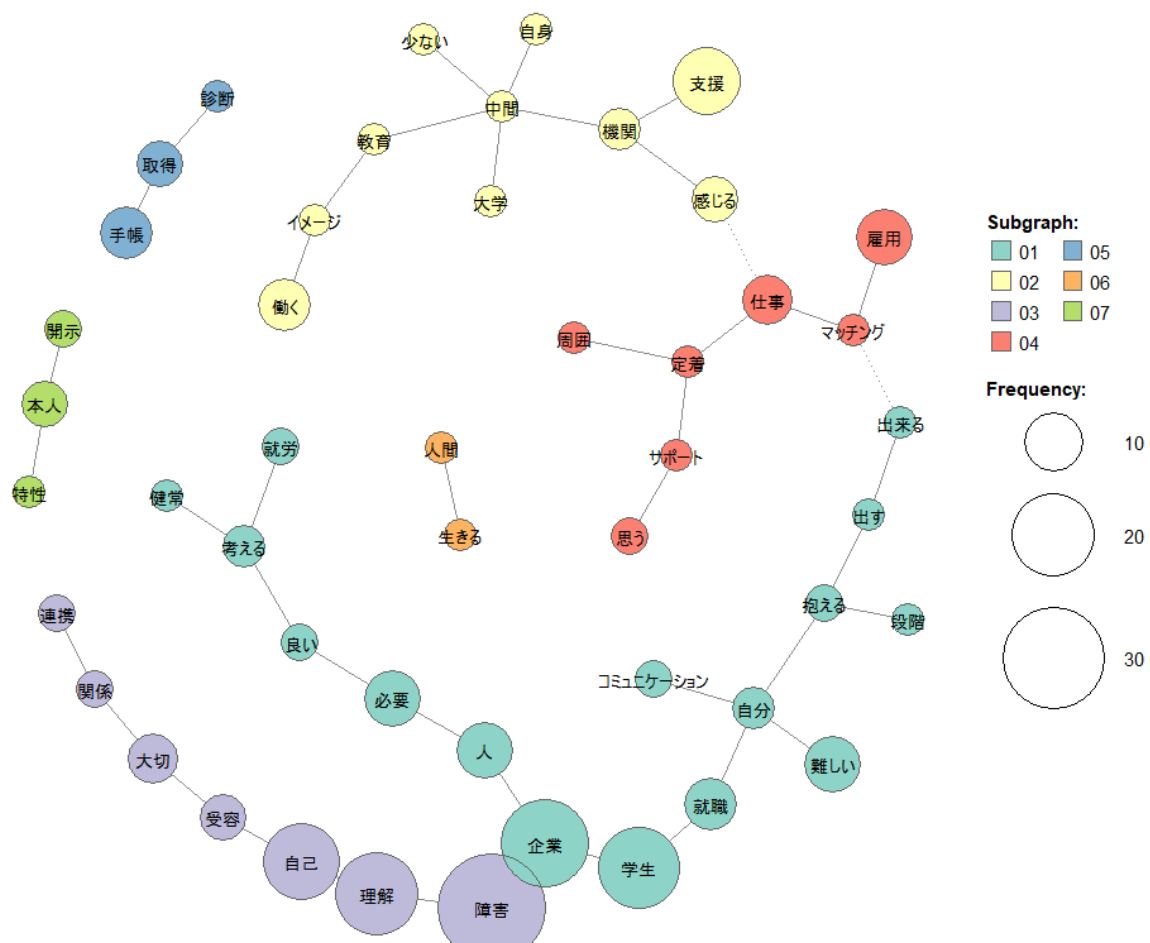


図1. グループセッションで出た意見についての共起ネットワーク図

【参考】自由記述は、KH Coder3 を用いたテキストマイニングによる共起ネットワーク図を参考にグループセッションでの意見・タウンミーティングに参加した感想をまとめた。図 1, 2 は、回答で用いられた語句と語句の関連を図に表したものの。○の大きさが使用頻度の多さを表し、線の濃さが関連の強さを表す。※配置された位置や距離は無関係。

グループセッションでの意見	具体的な回答例
(サブグラフ1) コミュニケーションの難しさ どの段階で企業に障害を伝えるか	コミュニケーションスキルの未熟さがある。 コミュニケーション能力は自分の身を守るためにも必要。 学生が就職活動をする上で、どの段階で、企業の方に自分の特性等についての相談をしたらよいのか。
(サブグラフ2) 仕事に対するイメージの難しさ 学生に対する支援の少なさ	企業としては、学生さんの強みを示してくれた方が、働き方の提示をしやすい。学生側としても、働き方が具体的に記載されていた方が、就職後のイメージを持って、検討、相談しやすい。企業側の障害者に対する求人の出し方も、抽象的で漠然としている（総務事務など）ため、仕事のイメージがしづらいと思う。 障害を抱える学生は、就労経験（アルバイト等）が無い学生が多く、働くことに対するイメージ（理想）と現実（厳しさ）のギャップが大きくなかなか就職に結びついていない。 企業で人事担当をしており、実際に障害を抱える学生と面接をしたことがあるが、自身の出来ること、強み等をPRできる障害学生が少ないと感じている。 大学在学中に支援が受けられるようにすべき。 企業側は自己理解ができている人を採用したいが、学生だと自己理解を行う場や支援が少ない。 企業-学生の出会いの場が少ないこと
(サブグラフ3) 関係機関との連携の大切さ 障害受容や自己理解の大切さ	異業種間でのネットワーク形成、連携がとても大切であると感じた。 採用までのプロセスにおいて、産官学の取り組みの全体的な連携がもっと必要であると感じた。 会社の受け入れが大切（関係づくりを！） 働く前の自己理解、自己受容の大切さ 合理的配慮は口に出さないと、企業側は配慮してくれないので、自己理解を考えて口に出せるよう訓練が必要であることの理解をすることが出来た。 自己理解・障害理解（自分のトリセツ）があまり完成されていないのでは。そうなるとなかなか採用は難しい。 学生自身の自己受容について-その難しさ 障害者自身の自己理解と周囲に伝える力について
(サブグラフ4) 仕事のマッチングや定着 周囲の理解やサポート	仕事内容を具体的に提示してあげるとマッチングしやすいかもしれない。（ジョブ型雇用） 雇用側の方から、「求めている仕事が出来たら手帳がある・無しは関係ない」との言葉があり、マッチングの大切さを改めて感じた。 長く続けるためには自己理解・マッチングが重要。 大学から企業にダイレクトで新卒採用となると、マンパワーがあり、障害への理解が進んでいて、教育体制が整っている企業でないと、障害学生の仕事への定着率は低くなってしまふ。 見える障害と見えない障害での周囲の理解度の違い 行政も含め中間支援機関が間に入りサポートすることで、ミスマッチ防止や定着率の上昇に繋がると思う。

(サブグラフ 5) 手帳の取得や診断について	困り事を抱える人に、どのようにしたら受診して診断を出してもらえたり、手帳取得に繋がれるのか。 社員・学生の中でグレーの方に対し診断をすすめる話法など。 手帳を取得することへのハードルが高い、親自体が障害について理解できていない、拒否的 学生が障害者手帳を取得するメリット・デメリットなど。 グレーゾーンや手帳取得をこれから考える人などについては支援が難しい。 グレーゾーンと呼ばれる方々へのアプローチを考えていかなくてはと考えました。 障害者手帳を積極的に取得し、オープンにして就職した方が自分が苦しくならない。 手帳を持った従業員をどのレベルの社員に通知してフォローしていくのか
(サブグラフ 6) 一人の人間として生きていくこと	障害がある人も、同じ一人の人間として共に生きることができるよう、支援をしていきたい。 参加者の方の「障害者としてではなく、1 人の人間として生きていきたいだけです」との発言がとても心に残りました。 だれもが（障害者もふくめ）より良く働き生きていくには、再度組織に関する意識や就労観の抜本的な見直しが必要である、という議論が最も印象深く記憶に残った。障害者が、健常者が、という区分をさらに引きのアンクルから見、働く者全員が分け隔てなくより働きやすい会社に変えていかなければいけないと考えた。
(サブグラフ 7) 障害や特性の開示について	学生が就職活動をする上で、どの段階で、企業の方に自分の特性等についての相談をしたらよいのか。企業側からすると、できるだけ早い段階で伝えて欲しいとのこと。（内定前に）新卒採用試験時に本人の障害（特性）を開示すべきか。 入社してから障害があることを言うのではなく、エントリーの段階からオープンにしてくれ方がサポートなど得やすく（企業・労働者両方）キャリアパスも描きやすくなるのではないかな。

6. タウンミーティング参加の感想

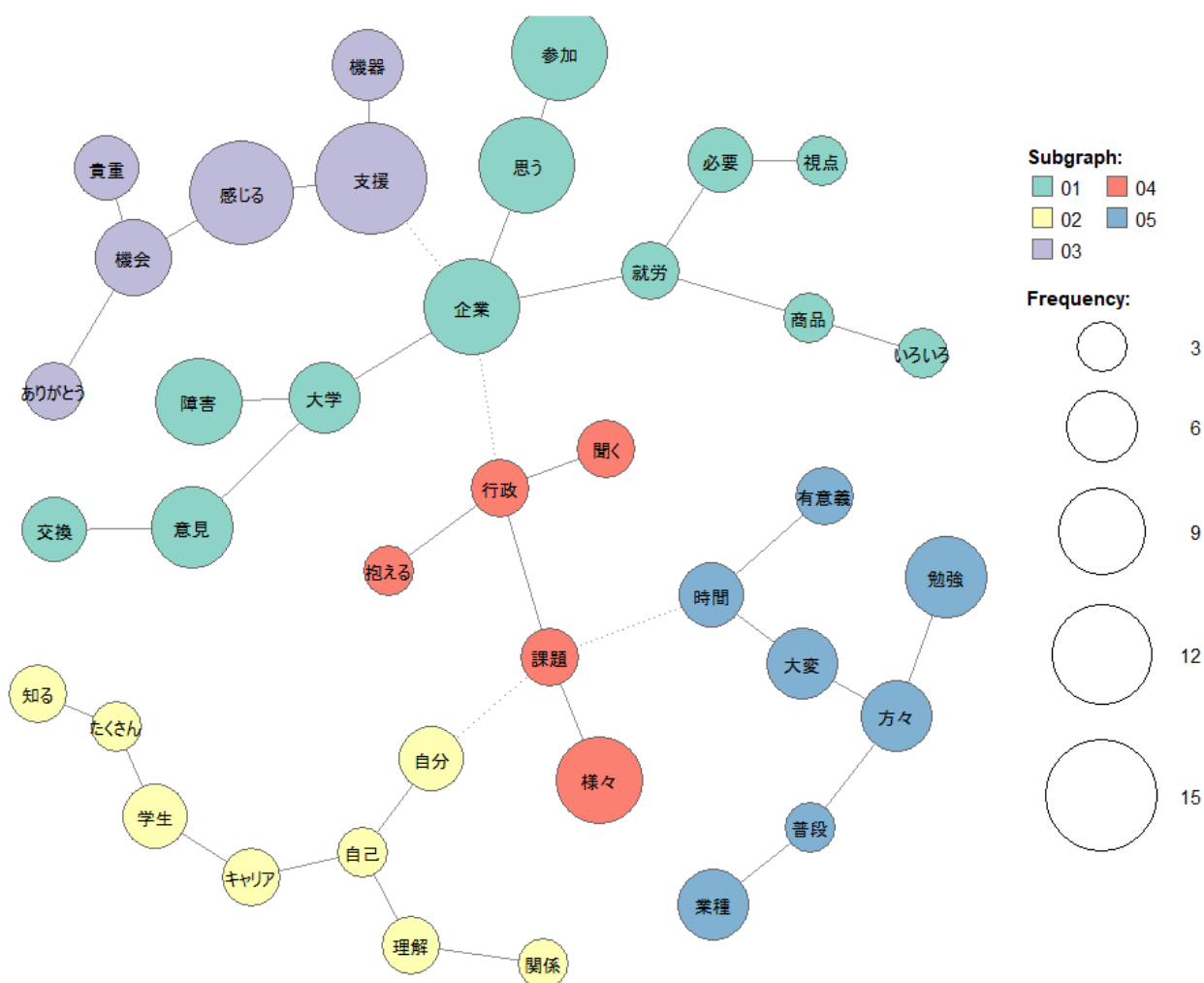


図2. タウンミーティングに参加した感想についての共起ネットワーク図

タウンミーティングの感想	具体的な回答例
(サブグラフ1) いろいろな意見交換ができた 支援の視点や配慮について	大学、企業、就労移行支援など様々な方と話し、いろいろな視野が広がった。 様々な機関の方が参加されていて意見を出し合い、課題感を共有できたと思います。 異業種が集まり意見交換する貴重な機会になっている。この会をきっかけに繋がりを深めて、生きづらさを抱えている方の支援に繋がっていきたいと感じた。 講師や話題提供の方々のお話、グループセッションのシェアリングを通して、支援の視点とインクルーシブの視点や考えがそれぞれに成熟していく必要があると強く感じました。 障害のある方に対する配慮については、いろいろな方法があり、その方法を使うことで働ける場が広がると感じました。 こういった機会を重ね、参加者や参加企業がそれぞれのファーストステップをコミットできる状態をめざせたらいいな、と感じました。

(サブグラフ 2) 学生の自己理解やキャリア形成について	キャリア教育的側面でのインターンシップは有効活用（学生にとっても受入側にとっても）できると考えています。しかし、コーディネート側の知識や理解力がないと難しいという課題もあるように思いました。 障害に対する自己理解・自己受容をすすめ、自分の強みと弱みを言えることが大切だと学ぶことができた。 障害の有無にかかわらず、大学生という発達段階にある学生に対して、就職を意識する前に「キャリア形成」の機会が必要だと感じています。就職＝キャリアと捉えられてきた時代もありましたが、経済、社会環境も多様化する中で、まずは自分がどのように生きていくのか考える時間が必要のように感じています。理解促進や自分・他人を認めるという目的で、大学低学年次のキャリアデザインなどの科目で、ナビゲーションブックを作成することは有効かもしれないと思ったのですが、いかがでしょうか。（いわゆる自己分析ではなく、自分のトリセツ作成）
(サブグラフ 3) 支援機器について 貴重な機会であった	支援機器に関しても知らない物も多く、導入を検討したいと思います 最先端の支援機器について、実際に触れることができとても良い体験ができた。 はじめは支援機器の紹介では、障害者の方に向けて作られた商品ではなく私も使用したことのある商品が使用されていることに驚いた。様々な商品が見方を変えると障害者の方の苦手なところを補えると思った。 支援機器を見て、姿勢が崩れる発達障害者の方へのアプローチに生かせると聞いて驚きでした。わかっていたようでわかっていなかったこと、知らなくてはいけないと思いつつ知れずにいたことを見聞きすることができた、とても貴重な時と場でした。 様々な立場の方が、一堂に会し語り合える機会はとても貴重だと感じた。 異業種が集まり意見交換する貴重な機会になっている。 貴重な機会に参加できとてもありがたかったです。
(サブグラフ 4) それぞれが抱える様々な課題について	企業の抱える悩み、行政が行っている支援、多方面から話を伺うことができた。 自分の立場で抱えていた課題に対し、他の企業や行政、大学など様々な立場からの意見が聞かれ、視野が広がりました。 様々な機関の方が参加されていて意見を出し合い、課題感を共有できたと思います。
(サブグラフ 5) 異業種との有意義な時間で勉強になった	異業種の方々とネットワークを形成することができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。 企業や行政の方々から、課題であると感じておられることとお聞きすることができ、有意義な時間でした 普段関わることのない、異業種の方々と意見交換をすることができて、とても勉強になりました。 初めて知ることが多くたくさんの勉強となった 普段お会いすることのない方々のお話を伺えて、大変勉強になりました。 いろいろと情報交換ができてとても有意義であった。

その他

この会をきっかけに繋がりを深めて、生きづらさを抱えている方の支援に繋がっていきたいと感じた。

障害学生の新卒採用は、企業側としてはハードルが高く感じますが、新卒だからこそそのメリットもたくさんあることを知り、今後の採用については前向きに検討していきたいと思いました。

障害に対する考えも変わりつつあるので、異業種で話をした方が対応していきやすいと感じました。

写真



鹿児島大学 有倉 巳幸 理事・副学長（教育担当）



PHED 代表 近藤 武夫 教授



鹿児島大学理工学研究科 西村 方孝 准教授



PHED 代表 近藤 武夫 教授



鹿児島大学障害学生支援センター川添 茜 特任専門員



鹿児島障害者就業センター
瓜生 彰 主任障害者職業カウンセラー



グループセッション（情報交換会）の様子



鹿児島大学障害学生支援センター 前田 雅人 センター長



集合写真